

2015年遭難対策訓練

- 【日時】 2015年5月17日(日)
- 【メンバー】 Aパーティ 小川L、吉澤、佐藤耕、田辺利、野村、竹澤
 Bパーティ 佐藤L、小暮、横山、長谷川純、(吉岡)
 Cパーティ 寺内L、小暮智、大濱、松本、野口
 Eパーティ 棚橋L、渡辺、小磯、萩原

【場所】 三ツ峠 天狗岩・屏風岩

当初は5/16・17の二日間で岩トレと遭対訓練をみっちり行う予定でしたが、天気が不安定な16日(土)は中止となり17日のみ実施しました。それでも意欲的なメンバー達により充実した一日を過ごしました。

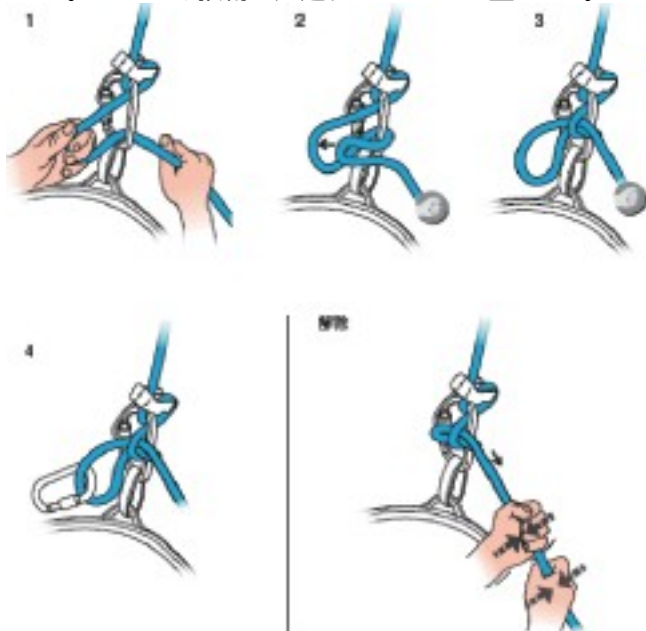
Aパーティ

◆訓練内容

1. 懸垂下降と仮固定(一部自己脱出)
2. 背負い搬送とプルダウン(ディスタンスブレーキ)
3. 介助懸垂、背負い懸垂、ビレイからの脱出
4. 1/3 引上げシステム
5. シミュレーション(①ビレイからの脱出と宙ぶりの救出、②転落した人の引上げ)

◆感想

・ロープワーク、しかもレスキューとなれば、不可欠なのは「仮固定」。今回は、ATC、エイト環共通でできる技を伝授された。シンプルでよく効く。なにより解除が無理ない。安定しておざらいができた。できるだけ技術を共通化できることが望ましい。



・垂直でないと登り返しの実践とならないので、場所チェンジすればよかった。



- ・課題は実践。実際に起こっては困るが、万一のときに、個別の技術をどう組み立てて対応できるか。訓練の最後に、トップが滑落し動けなくなった状態に対するレスキューをシミュレーションしてみた。ビレイ状態からの脱出にはじまり、トップのロープを切って(つもり)、救助者側のロープに移すという一連の流れは、訓練プログラムのほとんどを使うことになり、復習としては恰好のテーマだった。使いたくはないが、「伝家の宝刀」として年に1回は研いでおかなければならない。
- ・ザック・雨具を使用した背負い懸垂訓練で、実際に要介助者の立場で背負われて懸垂で降ろされる、という貴重な経験をさせていただいた。懸垂中に痛みなどの不快感などはほぼ無かった。ただ、要介助者の方が体重がある場合や、悪天候時などは困難が予想されると感じた。
- ・プーリーを使用した1/2や1/3での引き上げで、女性一人の力で男性一人をすると引き上げることができ、システムの威力に驚いた。プーリーとアッセンダーを兼ねるペツルのプロトラクションを使用したことが良かった。ただ、ちょっとしたタイミングでプーリーではなくアッセンダーになってロープが引き上げられなくなった。設置の方向、機具の使い込みが必要だった。
- ・介助懸垂では、実際に要介助者をサポートしながら懸垂してみたが、やはり自分の懸垂に意識が行ってしまい、要介助者への配慮が十分至らなかった(進行方向や障害物について知らせる、など)。要介助者の腰を支えるため片手がふさがる分、通常の懸垂よりもさらに注意が必要と感じた。
- ・基本技術の復習でしたが、昨年のように2日でやったほうが登り系の勉強になる。できれば、各技術を使い実際の山行で起こりうる事故を想定した救助訓練を行えばベストだったのですが、天気予報は運任せなので仕方が無い。
- ・余談ですが、翌週に行った一ノ倉沢では懸垂下降の仮固定、バックアップを多用しました。初めての岩場で懸垂支点の場所も分からずに降りていくので、トップで行く場合はほぼバックアップを取って下降しました。最後の1ピッチは垂壁の中で懸垂支点を工作しないといけなかったので(残置スリングがボロボロで、追加する必要があった為)仮固定をしてぶら下がった状態で作業しました。
- ・救助技術は万が一の時に備えて覚えておかないといけない技術ですが、岩登りの技術も、安全の確保(行動スピード)にも大きく関わってくる技術なので、こちらの技術の見直しをする時間を設けても良かったと思いました。

B パーティ

◆訓練内容

- 1.背負い懸垂
- 2.仮固定、登り返し
- 3.介助懸垂
- 4.プルダウン
- 5.ビレイ状態からの脱出

感想

- ・システムの細かい所がハッキリと覚えてなく時間が掛かってしまいました。
- ・せっかく三つ峠まで行ったのだからフリーも登れなかったのはとても悲しかった。 など

1. 背負い懸垂

- ・背負いシステムは定期的にやらないと忘れてしまう。
- ・岩場の角度が変わる場所、特に下りはじめでは足を突っ張り降りるのに相当力が必要となる。
- ・自分より体重の重い人を背負うのはかなりの負担となる。

2. 空中懸垂の仮固定、登り返し

- ・空中懸垂の登り返しは、最初ヘッドオンが効きすぎてスリングが動かなかった。3~4巻くらいにしたら丁度良い効きと動きになった。
- ・カラピナバッチマンでやったら最も登り返しは楽なのだろうか。
- ・久しぶりに空中懸垂の登り返しを行った。時間はかかるが、空中懸垂の場合はごまかしが効かないので、たまにはやった方がよいと思う。



3. 介助懸垂+岩の途中で収容

- ・事故者はロープにぶら下がっている想定で岩の途中でセルフをとり救助者を待つ。
- ・救助者はプレーキデバイスに事故者用振分をあらかじめセットし、バックアップをとり岩を下る。
- ・事故者を振分に連結して事故者側のロープを切り(今回はデモなのでセルフを外す)
- ・救助者が介助しながら事故者を下ろす。

以上の動作は介助懸垂だとスムーズに行うことができた。意識がない場合はどのようにしたらいいのだろう。

4. プルダウン

- ・人数が多い場合には有効と感じる。
- ・実際の事故現場では径の細いロープ1本で操作することもあると思うが、その時は上部の救助者のロープコントロールが難しくなると思う。

5. ビレイ状態からの脱出

- ・ビレイ状態からの脱出は、訓練のための訓練という感じがして実際の場面とは違っだろうなという違和感がある。
- ・トップ、セカンド共に脱出した後のレスキュー方法を知りたい。